

昨年の今頃のニュースを覚えていますか？1月29日付けのBBCニュースでは「ドナルド・トランプ米大統領は28日、長く待ち望まれていた中東和平案を発表した。エルサレムについて、イスラエルの不可分の首都とし続けることを約束する内容になっている。トランプ氏の場合は、パレスチナを独立国家とする。同時に、ヨルダン川西岸のイスラエル入植地でイスラエルの主権を認める」というものでした。しかし先日大統領に就任したバイデン氏はこれには反対する意向のようです。このような国家間の政治的な関係が、政治的な力をまったく持つことがないパレスチナの人たちの命を左右するのです。

560万人いるともいわれるパレスチナの難民世帯の4割以上は1日一食、9割のこともたちが栄養不足の状態であるといえます。このような悲嘆すべき状況に至った経緯をたどっていくと1948年のイスラエル建国に遡ります。イスラエルの建国は、同時に中東に戦争を引き起こしました。200以上の村が破壊され70万人あまりのパレスチナ人が故郷を追われました。その後70年を経て三代目、四世代と増えていき560万人に達したのです。レバノンに逃れた難民たちは、市民権がなく、つまり一切の政治的な力がなく、貧しさで差別、仕事に就くことができません。移り住んだレバノンでは1975年から内戦、1982年イスラエルの侵攻、2007年イスラム武装グループの抗争、2011年からシリアの内戦により、パレスチナからいったんシリアに逃れた人たちが、内戦を逃れてレバノンに移り住むようになりました。(参考: パレスチナ子どものキャンペーン)

ン)

このような人たちが聖書を読めば、すぐさま「わたしのことが書いてある」と驚くに違いないでしょう。なぜならイエスの誕生以来、

12 イエスは、ヨハネが捕らえられたと聞き、ガリラヤに退かれた。

イエスは難を逃れてガリラヤに「退かれた」。その逃避行は、ちょうどモーセが身の危険を察知してファラオのもとからミテアンの地に逃れたときと状況がおなじです。1ヨハネが捕まれば、ヨハネの弟子たち、彼から洗礼を受けたイエスも仲間だと見なされて身に危険が及ぶかもしれません。

古代エジプトにおける王ファラオの殺意とモーセ、古代イスラエルにおける王ヘロデの暴虐とイエスの関係には共通するところがあります。強大で制度的な権力をもつ王とたったひとりの人間という関係です。

到底太刀打ちできない強大な方に直面した小さなひとりの人間がなし得ることは、ただ逃げることです。それ以外に為す術はありません。振り返ってみればイエスは生まれる前から逃避行の連続でした。身の安全が保障されないひととしてお生まれになったイエスは逃避し続ける半生を送ってこられました。

13 そして(しかし)、ナザレを離れ、ゼバルンとナフタリの地方にある湖畔の町カファルナウムに来て

住まわれた。

イエスはナザレに逃れましたが、その後ガリラヤ湖の北端にあるカファルナウムに出て行かれそこに住まわれます。当時この街には、(考古学者の発掘により)漁師や農民、およそ1000人程度(200世帯くらい)が住んでいたとされています。

そこでご自分がこれから為すべき宣教に必要な弟子を集めるのです。その弟子たちはどういう人たちから選ばれるのでしょうか。

14 それは、預言者イザヤを通して言われていたことが実現するためであった。15 「ゼバルンの地とナフタリの地、／湖沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、／異邦人のガリラヤ、16 暗闇に住む民は大きな光を見、／死の陰の地に住む者に光が射し込んだ。」

イザ 8・21 この地で、彼らは苦しみ、飢えてさまよう。民は飢えて憤り、顔を天に向けて王と神を呪う。22 地を見渡せば、見よ、苦難と闇、暗黒と苦悩、暗闇と追放。23 今、苦悩の中にある人々には逃れるすべがない。先に／ゼバルンの地、ナフタリの地は辱めを受けたが／後には、海沿いの道、ヨルダン川のかなた／異邦人のガリラヤは、栄光を受ける。9・1 闇の中を歩む民は、大いなる光を見、死の陰の地に住む者の上に、光が輝いた。

その異邦人のガリラヤで、かつては苦しみ、飢えてさまよ

った民。顔を天に向けて王と神を呪った民。苦難と闇、暗黒と苦悩、暗闇と追放を経験した民。そういう暗闇、神の支配が及ばないといわれる地に住む民（闇の中を歩む民）、死の陰の地に住む者たちが光を見る、そういう民の上に光が輝いた。彼らにこそ光が到来する、すなわちイエスが来られて、福音宣教の務めのために召し出されるのです。

た「あなたの歩んできた神の支配が及ばない道から、向き直り、神のもとに立ち返りなさい、そこで憩いなさい。神の支配はすでに身近に迫っているのだから。」

17 そのときから、イエスは、「悔い改めよ。天の国（神の支配）は近づいた」と言って、宣べ伝え始められた。

この福音書は、イザヤ書の8章23節以下からの引用です。これは、紀元前8世紀（捕囚740～722）についでこの預言です。ゼブルンの地、ナフタリの地、海沿いの道、ヨルダン川のかなたの地、つまり北イスラエル王国がアッシリア帝国により征服され暗闇の時代に入ります。

▼征服後、アッシリアの王（ティグラトピレセル3世）は征服した国々の民族意識を崩壊させて反乱を起ささないようにするために、すでに征服した異国から異民族を連行し住ませるといふ政策をとったのです。また北イスラエルからも数万人単位で強制的に他国に連行されました。

▼異民族と交わらないイスラエル人と異国から連れてこられた諸民族が混在するようになってしまったのです。それが異邦人のガリラヤという言葉の背後にある歴史です。そういうガリラヤに住む異民族と北イスラエルの民族がともに異国の支配から解放されるという光を見る、彼らの上に光が輝くというのがイザヤの預言なのです。…この異民族との混雑が、後の福音書の時代にはサマリア人差別、現在のパレスチナ人の迫害へとつながっていくのです。

その呼びかけの第一声は、「悔い改めよ。天の国は近づい